

長谷寺

道明という僧が686年に法華説相図を作り、天武天皇（631～686年）の病気の快癒を祈って奉獻した。8世紀、徳道と呼ばれる僧が聖武天皇（701～756年）の求めを受けて727年に十一面観音像を建立、寺を拡張した。何世紀もの間に数度の火災や地震の被害を受けたものの、長谷寺は数多くの支援者の助けを得て再建され、拡大していった。その他の建築的な特徴としては、1889年に再建された仁王門があり、ここには2体の巨大な仁王像が収められている。また、本坊（僧侶の事務所）は1924年に総檜造りで再建され、重要文化財に指定されている。また、五重塔は1954年に完成した。

長谷寺は、日本の仏教の密教の一派、全国に3000寺ある真言宗の豊山派の総本山である。西国三十三所札所のひとつでもある長谷寺は、慈悲の菩薩である観音信仰の中心寺院である。この寺の本堂には高さ10メートルの十一面観音の像が祀られている。優れた宝物のほか、長谷寺はたくさんの花や美しい自然でもよく知られている。

花の御寺として知られる長谷寺は、あじさいやツツジなど、何千もの花々で彩られている。4月中頃から5月初旬にかけては、約7,000株の牡丹が本堂に上る登廊に沿って咲き誇る。このほか、4月ごろには桜が、そして10月から11月にかけては楓の紅葉が楽しめる。長谷寺の美しさは、何世紀にもわたって、数多くの日本の芸術家や文学者たちのインスピレーションとなってきた。登廊の横には1本の梅の木があり、これが紀貫之（872～945年）の以下の和歌の題材となっている。

人はいさ
心も知らず
ふるさとは
花ぞ昔の
香にほひける